

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 JAPAN



遠  
1306  
2  
門號卷

未稿を二編の叙

予世の爲め編むとまく書の御法事

酒持使

と圓舞用ひて紙墨を磨か

君の御事

お。然も筆毫難女をて善く書き意を傳へ

トの處

孝子慈父節婦の行を辭をて世教の一助

トの處

あり。然もに性之端は端也正き人故被事のみ一人の



いはうとくに國胞の事よ就て大す苦ひま  
さう詰とくとも何よりちよびまよへる  
且直ちもおれよ事よ達すよか。さ文の遺命  
を守ふ。潔女の墨縞。いづゞせしや。唐葉。いづ  
時紙。清じよどが。あよ。よだれま。草木。いづ  
墨葉をみる。柳鬱の。脚本。人をも何

坐ツバ。友人點頭

「ハ」大意ある

子の天保のまゆ月。而今。えれの。おはと  
まのま序。言ふ。抱るの。

本草主人

春色初吉加壽視

歌川國直画

初編四端を

りうどじうとだんを  
あらはすもとふきのまのまくらん人のよの  
事めあつてまきくわらうめがうるを  
はるかにうるをまくらんのまくらうを

さうはいね合人

歌亭鯉文作

おまくはまくらびやめていためのめん人を  
まくらをむけばうべくまくら門の福基のまくら  
のまくらのまくら二編うべ編入編延くまくら

心物

梅のゆ

色代

よしのくわくまくらひまくらへ一月梅の林小あそぶ  
よしのくわくまくらひまくらへ一月梅の林小あそぶ

繪入中形

横

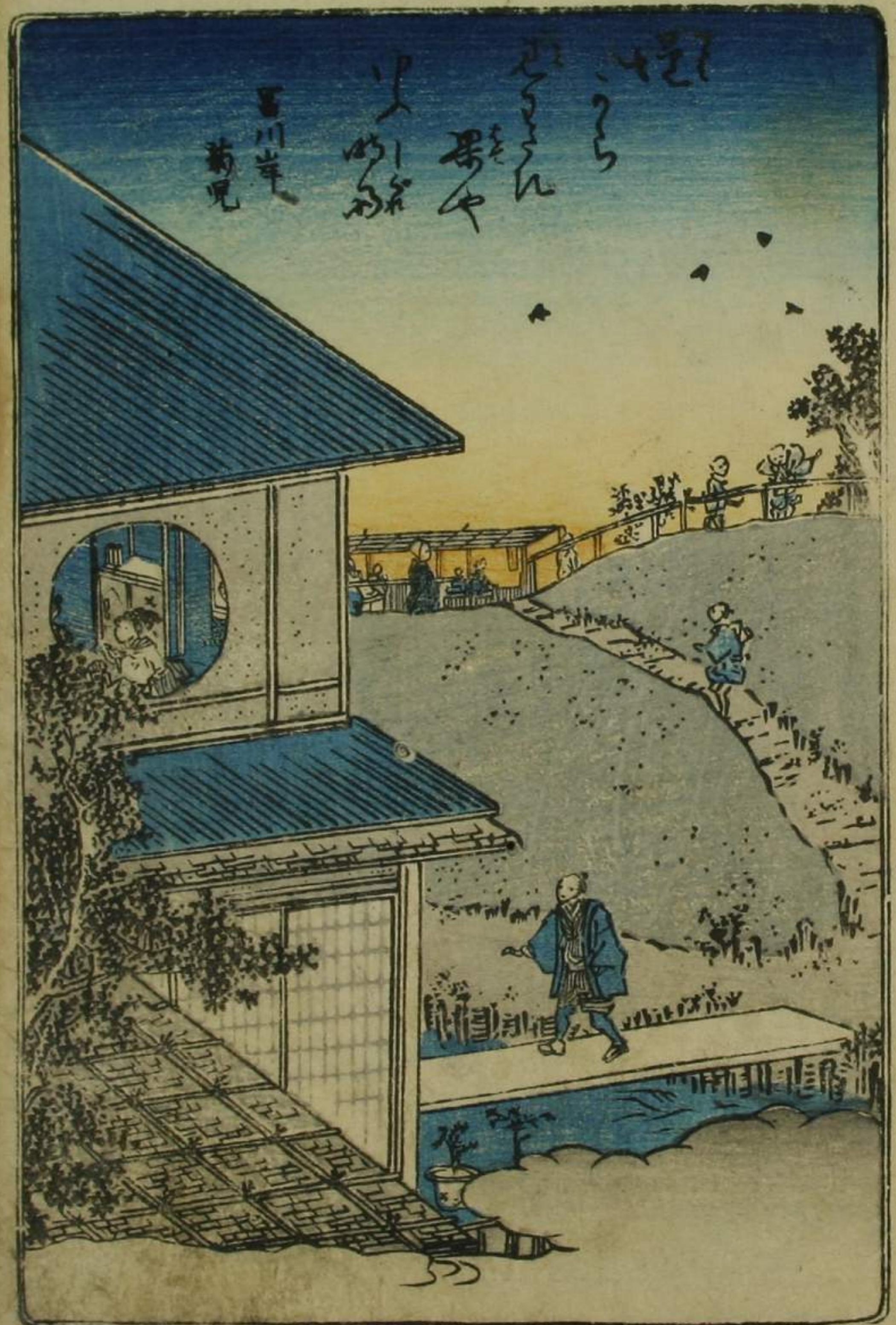
わまとせのゆくらとまくらゆくまくら本人まくら  
つゆのまくらのまくらまくらをまくらをまくらをまくら  
まくらをまくらとまくらをまくらをまくらをまくら  
まくらをまくらとまくらをまくらをまくらをまくら

外題鑑

本切

わまとせのゆくらとまくらゆくまくら本人まくら  
つゆのまくらのまくらまくらをまくらをまくらをまくら  
まくらをまくらとまくらをまくらをまくらをまくら  
まくらをまくらとまくらをまくらをまくらをまくら

佐本貞高撰集



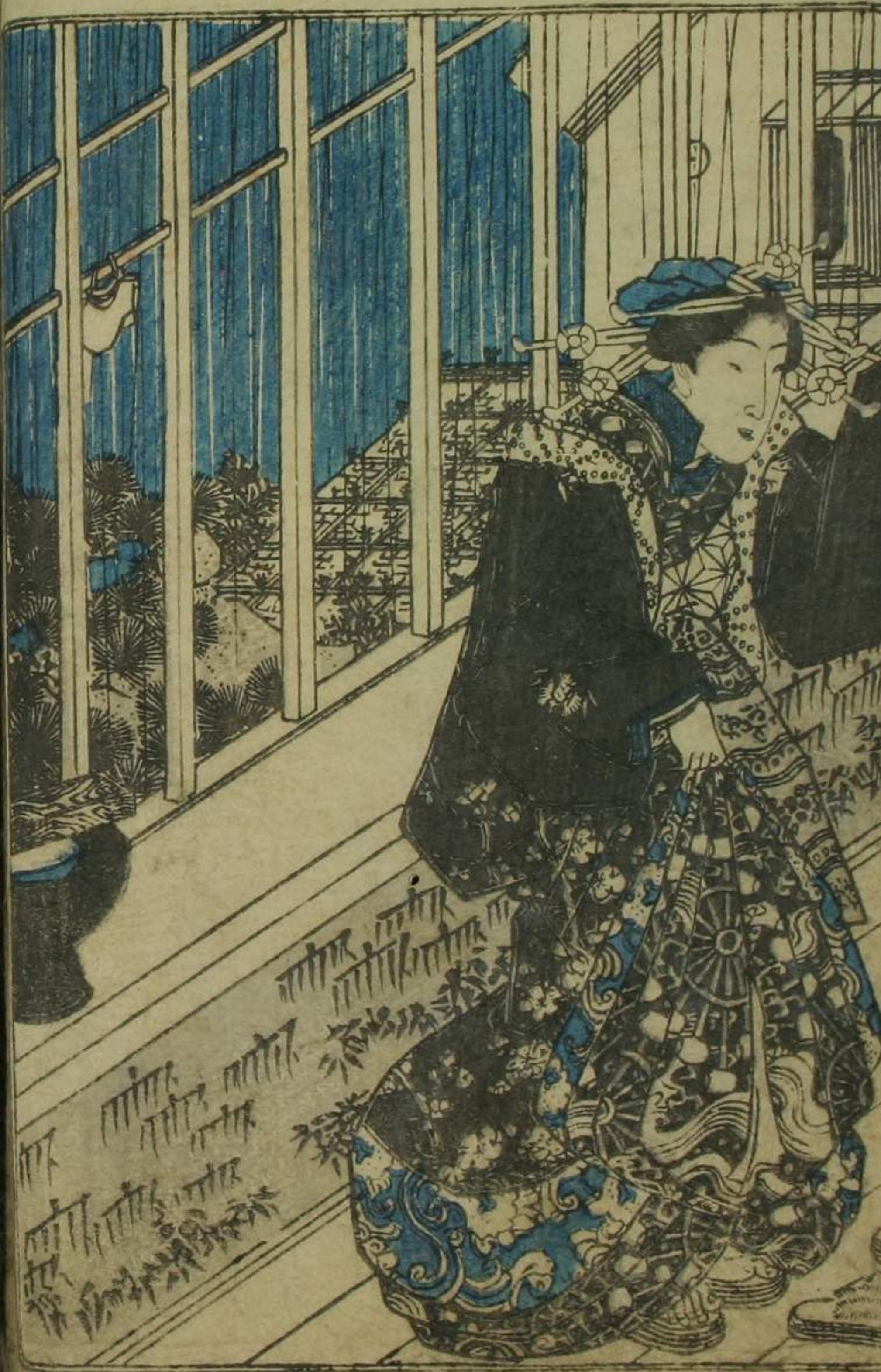


閑情本摘花第二編卷之上

第七回

江戸 松亭金水編次

山谷通ひの馬の蹄ふ蹴むけ一のう泥町と峰きよへる場  
下りと些少の橋鶴の用ひまへとき軒並み。わざくと重雲の明  
ゆく室ねぐらと下駄の雪踏み足あるのちく室をて繋がる所  
うちこえかう兩個。アレ清さんとやあまへます。ほんまに  
やんこり宅ども。うかがひ本のえつこうと文字の窓。アラ







まも「不<sup>レ</sup>ぞね心<sup>レ</sup>トモ。」  
雨<sup>レ</sup>と風<sup>レ</sup>ハねの<sup>ス</sup>。顔<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す。あ  
を復<sup>レ</sup>ふ清<sup>レ</sup>助<sup>レ</sup>、側<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>俯<sup>レ</sup>、清<sup>レ</sup>助<sup>レ</sup>へと伸<sup>レ</sup>て。おちせ<sup>レ</sup>、脊<sup>レ</sup>  
撫<sup>テ</sup>、<sup>タ</sup>おとき<sup>レ</sup>、女児<sup>レ</sup>、若<sup>レ</sup>勇<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>身<sup>レ</sup>をやせ<sup>レ</sup>、不<sup>レ</sup>残<sup>レ</sup>、自<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>  
が所<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>さ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>ま<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>ほ<sup>レ</sup>と<sup>タ</sup>す<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>ご<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>の<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>  
く<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>め<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>ほ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>身<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>自<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>  
た<sup>レ</sup>と<sup>タ</sup>、<sup>タ</sup>え<sup>レ</sup>ぎ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>つ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>今<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>冥<sup>タ</sup>  
翁<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>ト<sup>タ</sup>、<sup>タ</sup>一<sup>レ</sup>聲<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ませ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>遠<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>、傍<sup>レ</sup>へ<sup>タ</sup>う<sup>レ</sup>寄<sup>テ</sup>、<sup>タ</sup>ア  
ア<sup>タ</sup>お<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>え<sup>レ</sup>る<sup>タ</sup>、<sup>タ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>め<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>私の<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>縮<sup>レ</sup>ひ<sup>タ</sup>ゆ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>じ<sup>レ</sup>ざ<sup>レ</sup>ひ<sup>タ</sup>  
は<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>を<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>ぞ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>き<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>モ<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>手<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>も<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>び<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>せん室<sup>レ</sup>、<sup>タ</sup>お<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>の<sup>タ</sup>毒<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>

清一「さよコトア  
ハサウエーが小黙して。もの毒々慷慨の如く最初も歩へ立  
言。少う外れのものを。立正は身の口説て御高きおどり。  
不穢自己の智。アキセヨア清さん虚むらう。それが  
何時幕さんと会いとや。逃れ際まつまく寂寥  
かはゆうと可ません。ト清く助が寝ねんであく助のわうへ  
あをぬうけて搖る。清く助は笑ひあをせあうと  
起き。清ア漫まく。また朝服おぞまら。モ紙不織を捲  
押へ。清ア漫まく。また朝服おぞまら。モ紙不織を捲  
きと。度々斎もうヨ。モ紙アヤ弱へね。私自ア清一モ事ア

まごと男と圓枕ふたりのうへ。おせへ男ハ女トテ不強  
達うじゆくまは。ほへて他の人々に振があらねば。自己ア性  
質が弱いせへく左振へりかく。若弱くて口不呈す。是う  
文まる人をか見立ませ。おせアまたも振る。丸舞エを言へ  
ば。おトヤ他の人ハ否でござります。ほへて其へりがそまでもが  
坐るも見てゐまぐ廓の差し元のてゆふ。高らうつけ。ノ色の向  
じが一席から婆太のわざ人と仰ぐ。拂一きふ十指をしてお  
じけ。おや何月松が満とま極みゆか。一きふ。ササき

お園せきまくす。私へ今までもおまえとよろしくあ。男と婆太  
で。お一席あるまわせんの。おまえこそ先頭お管  
せき。右門のうお娘四さんと婆太もま歳て肩を拂つて。股を  
衝突する。時々顔を見ちや。完かへと拂一きふしてお在  
年ふきがやうどまんう。枝ハ右門の女兒ウセシム。左門  
おお棚へかげておとづれ。眞ぶ惜ひ。ヨト膝のやうと肩  
は。清々タタキ。お乳アモジ。覚えてお車下のう。金が太  
股一満極のゆうを。人差指と実バ。おせへ嗟と表退て。義







清一  
「お前宣教本が持てやまぬ」「アラ、僕もわざと見せう。お前  
え方の頭をようまひ、きをへて松葉扇は」ハシマシタモジモウタガ  
お前をして書ふよ。アラ、アラ、二朱金ツヅキ一斗トド。  
お前アラ、お前アラ、一寸スズメの手紙ハサウエをかへり、  
おまえまひく。身カラの出でで、ハハハ、お前アラ、宜ヨシは  
ほう積カタマリせつけとも困クモリる。おまえ、おまえアラ、腰ヒダえ  
筋スジのつハのへ宣アラ教ハジメルませんハジメル言ハナシへ立タチて下シテ行ハシメル程ハシメル、鶏卵トリヤク  
の空ハコ曉アラタニふ泡ハバキふと見えミツメ二人ツが儀ハセを揃ハセルてあつたれタタケルお處ハシマリを  
おも貰アラタニ、酒宴シテをさうがふハシマリ、や己アラタニ利ハセみゆハセべハセ。おまえ、下シテ  
人アラタニあつて、「アラ、達ハシマリも當アラタニう」とつづハシマリて、おまえ、肩アラタニの空ハコ  
破ハセてよき。ま、「アラ、達ハシマリかくん、圓ハシマリえの空ハコをびとハシマリて下シテ、  
往ハシマリへ様アラタニ側ハシマリ不ハシマリ樓ハシマリなり。障ハシマリみを細ハシマリ間ハシマリ不ハシマリゆりて、一個ハシマリの事ハシマリを天ハシマリへ挿ハシマリて。  
男アラタニおひへーうハシマリ、やハシマリ、「アラ、達ハシマリうと存アラタニじて、久ハシマリさんアラタニで、おまえ  
おまえアラタニ、アラ、居アラタニをせんアラタニ、「大透アラタニも見アラタニいがだらう  
おまえアラタニ、おまえアラタニと四アラタニばうアラタニ、アラ、おまえアラタニをせんアラタニ。

大考のうをとる。まだ大まかに、お算さんのお考のからひでござら  
ます。ス「アタマアホ算さんのお考の邊をさ」え「アヤシイ、豪、とので  
ござれました。モシ心病もでどもトその辺食へかまう。努力もあらず  
鳥をして、やうべえ渡へ顎のわらふか一深けと感き。久くは代の  
よりもねへ。福見の狼さしが近寄てすましまサ。ねじやまともあ  
ぎ。此間じアノが懐の嫁入準備ごとく。縫の縫あと逃へらと  
わく。先刻も度詫て附り。今わくちあせまつが居ね。とて、お寝か  
ま。おまじめ。お母さんハ眼と瞳睫とて。まのうと闇川へどもをま  
アヌ事まつらう。親ふとりう。有難へり。一個で苦勞ふ  
あそむなまつたのとアラを。まふれの毒でうねり。ドレまう。お  
釋。よせませうと言ひ。アタマア見とふ。大概に當つては、お宿ふ  
人グ。一。様一物もわくが来まつて、お宿ふ。第一泥町の龜堂  
ざ行まつ。仕次う先頃俄の時を連れて、おうむわくが、毫ハ初  
てま。肉室まんハ原まつてまでこもろ易ひう。情とて仕次へのも  
ねく。ナトやうてギツリ頬、まふ途とドヒ乳を沉め。アヤアア、ばく

ひづでござりまじれ。化ふお對身でもわづかてのうね  
隣の草のえも。明日来えの宅へ表座み候とてく。宅へ歸る

あらす。モレのよろこびの人もわざ人のまへまへまへん  
まへ聞さん方の様へ里へ居ます。まう情合を度せたる様が義  
事ある。まへゆきのめぐ。まへ左宿へ太急でござります。ト  
ちよへ化せ歌く。已づひの袖うへき。のめゆじどほきも  
頃てりまぬ時宜されハ斯技様をださるのみ。流石昔の夫人  
うちの苦勞と國づぶ根うふ胸のうち。興奮と複に驚ひます。

## 第八回

二間の両側へ着を重き類見合せて息を詰める。腰の筋の筋の  
久原足達圓くまくとて御先へ汗毛打と切り合ふ。まはせ  
を照ふうじ姿と絹体の裡で汗をかきを嫌ふ。物が耳の  
傍へ口を寄せ。舌をアシモウタの喜怒えが眼を滲むべと至  
じをすゞ元げう満て。あともうでまく左様だら。實坐よ記念  
ゆゑをかきかう。何極かあうか歎きがたりと思ふと宣ふ今度  
解胸より瘦へ生じをもややアねの定まりでへきむるを筆



今死んであまのへりがひだまふ。満へ鏡と雅釋と見し物ひとを  
詠。ども死るやうやう。晩ふ死ゆき。『死』は熟  
考えまたと云團。ぐらうま先へ。身とと言ても眞う。幕  
と竟く。身とまほのラトモくまく。楊柳をふ角ふ波。かくとく。  
さま  
ごつね。身のすみ。ともうき。つぶ  
まの手と歎あうね。情を助す。但よ族の露けまふ。身を又きて  
居る。身へゆく。身を歸して二夢。あり。『ゆめをき』  
らうよ。満アイサス。右がおとこま世さん。この通つの熟熱で察  
き。からせ。あくえん。ど

弱うのス「む、三院のひも左様存じまへ。お見ええ、ハヌ翁のひり。  
モハ不兄勝とあつまへとお慕キの事。お至ふ丈程あつて思良  
めじ。おまけど親望あるまき格別で、益母様が嘗當物を  
持てて入るあやの御心と存ましと實ふト言つけて、疾せ懶然と  
落せば、豈ハこれ御心也。猶御まう嬪ひふ。合彼とモ所  
うち付して、おまも立て硬うるを。お次へ傍人まうきて、  
まんが廻一ノハカラを。おまけど是も残因縁づくと申  
でござりませう。眞面目に理屋ヒヤス目あら。おまえ、  
おまえ、先から親のまうのせ、而もお様ひが宜とやまとのでござ  
りまじけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。  
せんか。行幸のまちあ個で牛とくお暮へきふとぞて、四任  
と申をかうると。仁様でもうまくからぬと無いがとが牛とお  
かのよう。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。  
思へばまじの感候。お行次より、海まで被乾く圓をかうりと  
お元の日もや園で、晡時おもきりけど、お個へ密山ふ箱  
だん。おも今宵を延きべき命をみゆく傳とせよ。お

お元の日もや園で、晡時おもきりけど、お個へ密山ふ箱  
だん。おも今宵を延きべき命をみゆく傳とせよ。

き  
重みよがのまほ半人ハーフのまほうじよもとを遠ざか  
せ晒し。世の爲めに儀イニシヤにて世の偏重姿カタチをうかぶ。  
れんまきあらわげと弱ヨクる氣エニシヤを直マサニ。頼ておはゆ  
るがよみ。あらわすり。あらわすり。あらわすり。あらわすり。  
越へ田舎道シロへ五古町ゴコマチとくに端ハナの郷カントウにて相善シヤンゼンす。  
あり寺アリジの大门ドウモン左左シラシラね柏生カシノ今ハ子種チズミ也枯葉カクヒ。  
霜シロふ強カタシロて薔バガ一合イチガ、多タダらふきの雖シテ近アツシみ見ミムも氣エニシヤせ  
間マジ。わらワラなまう。ミ  
鰐カマへ行イハシう修シヨウかが畢竟カタニ行イハシも居リ。寺アリジの達タマツむ先マジ



がまかし。り  
くそ成ません。まく權きんを守まつる。連つれはとくの内うち  
の手て。け。まくきん。まくきん。まくきん。  
も効うも底そこ。一いつ。我わ千せん言い。も通とおひと。も通とおひと。  
アヌアヌ。アヌアヌ。アヌアヌ。  
あ親おやぢのゆ。身みの上うまご。か熟じゅくさか熟じゅくさ。わくわくと。支しヒ。支しヒ。哀あ。

あ親のわら身の上をざらし歎きかうへと支を宣ひ  
けまど。今更ひ々愚痴のむと。芦すまをん行ゆもひづふ覺  
悟て通つてで死きトあをせばて諸傳。頬見乍れ我あだ。  
圍然と渺々と夜水のうち玉の猪も今みで切きりへやの因縁そゑ  
あまへ蓮葉の一室。わせ。往々きしげ此世事。九天二國の  
もじぞく。もじぞく。もじぞく。もじぞく。もじぞく。もじぞく。  
寂寥多居より。猶も莫が。もじぞく。もじぞく。もじぞく。もじぞく。



幸<sup>ト</sup>仕方<sup>ト</sup>が<sup>タ</sup>か<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>難<sup>ト</sup>  
か<sup>ト</sup>草<sup>ト</sup>へ<sup>ト</sup>遠<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>先<sup>ト</sup>罪<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>協<sup>ト</sup>  
か<sup>ト</sup>命<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>佐<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>當<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>せ<sup>ト</sup>死<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>世<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>實<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>因<sup>ト</sup>  
熙<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>毒<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>覺<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>底<sup>ト</sup>な<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>  
也<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>切<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>切<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>逸<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>草<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>理<sup>ト</sup>で<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ざ<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>  
ま<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>感<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>居<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>魏<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>空<sup>ト</sup>老<sup>ト</sup>女<sup>ト</sup>ハ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>兵<sup>ト</sup>  
ま<sup>ト</sup>。感<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>居<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>魏<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>空<sup>ト</sup>老<sup>ト</sup>女<sup>ト</sup>ハ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>兵<sup>ト</sup>  
頭<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>個<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>伴<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>西<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ぞ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>

開情末摘花第二

第九回 江戸 松亭金水編次



わくときとき甘美のと極て「今日より一ト臺あり」と。  
北里の堀が庄より「宜矣やどん」と鳴かすと近ち北廓の  
あへと  
絵書のうちふとく書とれど。あの青樓の在る人へ各  
食事のりうござ。故人京傳みが青樓の書の世界を錦の裡と  
呼ぶ。よもやまに。よもやまに。かの宜矣のあへとくもや。あへとくも

雨あつて。櫻子ふうふの日。風あけまじ。屏風の床へ櫻子ふく。旭へ  
高く。深づても。ひまむき黎明の公塔ぞまべ。什麼とく。清浦の壁上  
金盞清鶴。座へまよひ。客の福見屋の米次郎。雨宿りの道中  
えん。竹川。郡守持の竹川。今起てゆく。湯へ遠入。まよひ。而翁  
毛。濡毛。杖をさげて。清鶴。座表へ來り。屏風の外へ。竹川。清鶴  
えん。起て湯へ。毛は竹のあいだをく。えんが竹。郡守へ。おがく。遠入  
あいだをく。毛は竹のあいだをく。えんが竹。郡守へ。おがく。遠入  
を。耳が入つて。聞を覚へ。まよひ。まよひ。竹川。えん。遠入

今朝、また大遙が昇る。起きて遙くへじやう 竹をも軍のそ  
ざあは。もう宜々やどんが先刻まで仕事まつたのア きよ「室には  
きよへ竹門の邊生がある。園を号す。たまめのふせんにきよ  
起て來ましへんうち竹へきどひぎあるにえ。じねがへて来てもげま  
かうト脣風をする。口と見てか一吹の里入 けいりゆ  
さんが居る。まへう。うせ、まねみ縫ひ縫をほそにわざも軍の  
ゆまんのヨリまんざつて過るやう脣風もはまつた。竹へサ

左様。どうもあらへん。もうねまやまきにまえんは、歸ふとて、あらへん  
居まつじゆふがまくは、火入と持ひ、次の間の火盆よ  
わす。火を入て持来みどり、米ぬか布も暖とま  
せ。遅いやうざの竹へよく今月の居ます。またまごも板でもみま  
せんとまめへ連携をとて居り。竹へ米さんもん、先へ定めたりと  
あまつませんよ。からむとおのれの人に。胞父國ふあまともと男ひき  
けまご生肉の客をえが、茶食をツイ來まへきど。きまえれ  
おががまへきど。おもてなしをうながす。竹へ在り、おのれのうながす

が赤連が渡来男の兎と猪を狩り、ごくせ作可也。ヨトリ  
さきま。ナミキテ松生屋左衛門。トヤカホマヘト。金の工面をもて松  
麿小遣。また、竹ノ松生屋もれきも。米ノ大安。めど。堂草。おもて  
見てやうとす。コラモアヤ左衛門とア一目記て柄でも飲う飯で  
も食ふ。トナリケン。竹ノ次の間。モウも飯が来て居ます。米ノ左衛門。そ  
ちと物をす美きものを眺めてまことに。お元氣が整ひます。あら、  
おもい。おづか。まつアイヌ仕へ。竹ノ。まつアイヌ仕へ。おもい。  
え、まご宿て居ます。竹ノ今陽が這入て居ます。まつ倒で







正月をまつと二十両ハ入まひたら大變だほほまふまご勤う衆さは  
かう内酒も金を貸しきれ。ヤコト言ひだけ早ど私事ア我傍ヒテ  
些モ借まへんハ米ア借ねが宣のサト支個シハラハ睡まし。兩ハ頻クノ  
部屋モ。ミ寢室トテ下庄裏ふ内間女ガ寝ひの二床宿坐  
き。國えてより淋一當下廊下セなどしくと急ぐ。墨青草ふ着モ。清  
び。ギリキ。トナド。ウナ。タマ。タマ。アノ米さんハ近道苗ダ  
草人ハアノ泥田の龜屋の内室まへざる。タマ。左袖でござ  
ます。私やア米さんふ些ち嘗一ヤハリ。アリ。アリ。アリ。  
草人某さんちどうく。左袖ヤテち号る。タマ。アリ。左袖でござ  
尼扇を明け。如此。このようセヒ。米ア左袖。右の用。アリ。方へ越ヒ  
えん。左のト。左の。アリ。蒲衣のよへ起つて。おまく。右袖ヒテ尼扇の外へ  
居。タマ。且那よく入まゆ。タマ。おまく。右袖今月ハ米さんハ近道苗  
草人ハアノ泥田の内室まへざる。タマ。アリ。左袖でござ

。まことに弱い者のうへて強ひ宜けども間のあらざりで。合角も  
ひきく苦勞をつてゐる中。とりひ廓の者のみにも嘗てござりま  
す。密使をねらひ人の図ふと着てござり。解つて來まじ。ま  
た。かく見えて見ゆをせしむれど。地のうへて。まことに  
きふをひき。さう。禁居所を暫く居ゆき。苦勞。ごく左様言へま  
す。久しくあくやうふて。見る。兩ハ薄一もの毒。うごかぬがゆゑでも。そ  
して。毒をかぶると。毒母さう。がだくはく。まじ。お死をねがふ。ごま  
り。され。おまくはく。お死をねがふ。まじ。お死をねがふ。ごま  
り。され。おまくはく。お死をねがふ。まじ。お死をねがふ。ごま

え  
おおま  
あれまわ  
もがんま  
黒と作まへて文であつて。三番端へ今もまだまづ運うで  
がほのまくら。船今日ハ來ない飯一ヤてお呉きまくま。左様う  
康いあひアからう久を此方へ越して是き。までもお怪とや振  
車をテ飯を度在振て見立を善母さん言解うきゆもとは作て  
まへまくら。今月車不お歸んまくまくま。名端へ善母さん  
ま極スル氣を惜で居まくら。車か多ので歎んきぬ。芦苇  
でもお締カヌート屏風。うけてわら草をそつておまと  
甚振ふ意。ねぐら宣ハナ。また宣カウマセシ。おがきを要旨で  
すすうで思。ざまくら。す單く。歸んがま。米司そんか  
豆々。今ふ歸る。すと。さきくがら。多寝のゆ入とるが。清静。猶  
まうりふが。かほも側。かほも海。かくら。立。泥町へまつえ  
治ふ達。猶も委。き。寄。と。國。宅。の。ま。接。ト。し。されば。かの  
まうを絶。ねて白羽根町へと帰つて

第十回

うかふ。  
延麗を。もうよう早。今日の。世の。俚言。ふ。時雨。月の。半旬。小。夜。の。き  
ふ。まつひそ。とりへ。ゆ。六。現。ひ。陽。日。の。継。き。最。中。の。べ。殊。ふ。高。人。ハ。わ。

まがたより人の心入行物の取引。湯壹の注文時背せ事ひ賄爾を厭  
お用ひまへ。一日の暮る。瞬間とも思へべ。是れは営業の平常ふ  
とて人世一端の勤怠をもの言ふ。要せば。身のな樂び無用の  
手口を薦す。財政失ふ。是れを恐きる人とめて。終更天の罰を受。一  
生を活さう。世間の童蒙り。此本を看る。能く心有りと。樹の  
老嫗を言ふ。斯て米穀布衣。家み拂う。妻はもう密と。自らの  
室入まも。四邊見よて。極頗る。荒々。空ぬ。や食のうち。又不使  
ふ。ふども。自然と火燒。蒲を被す。またうつくと。尚がある。

までも全くせむ特くよすへのやどぎの日暮のす。ナニ暮もあ候よしの  
一併ひとしんでもうけとば一日やそとらのゆきを左様さうようへは仰おほませんがまうごとの  
ひそかに身を揺ゆらで入いる所ところでござりまぬから。猶のゆりを夜よと置  
おおかとのぞびらはまま。米こめをすゝめよ。五穀ごこくをぞけよ。ナシ一月つう。そん  
うふ膳ぜんをかねてゐるゐるにも宣あらわさんさんにあり。まますまよ。ひ赤あかさんさんの四角じゆく  
もとやひのゆゑゆゑをよびてまへ。無母むぼあるも種たねを効こうせねばねまへ。う。  
おおれを休やすてあよひてあよひトとひ捐なげて坐すわべ。米こめ次布つづふへ贋わら剥むし  
きき。身みの行ゆが身みの行ゆの善よひひを顧かのて。鬼きも角かくす。費うぐべ。

かへりまゆ。初更過廊まよわへ。番ばん廻まわ。格だの申ま帳あ面めんを揃そろひ。う。げ。  
をををををを煙えんをを立ち立と真ま盐しおを潭たんへ。その日の晩ばん入い却室かくしつ。そく。美  
者もの暗くらき片かた闇くらを。密ひそかと勅てきす。一切性せいの此こ故ゆゑうん。湘市しょう市いちわ  
どど。あらひざざ。あらひざざ。あらひざざ。枕まくらと。淀よど川がわの夜よ影かげを揃そろひ。、  
額あらわの真まままのうと。廢はい居ゐ。九くセ高たかと。せばらう。眞ま琴ことの聲こゑと  
見みえを積たせ圓まんす。ほらう。母おのい柵さは徐ゆくと。茶ち漬づけあらう。食くく  
まま。米こめ泡あわ。見みえ起おがう。物ものす。言ことを。據のの上う。す。と。裏うら。聲こゑ  
ああ。おおか。傍そ。産うぶを。ある。かかう。采う。や。亂まハ行ゆ時とき能の。米こめハイナニ

先初降玉坐まき。袖左様さう右様う一向よううとうが言いふサテ  
胸むねとも圓まんがだらうだらうがお家いえがまご奉まつる緊きんのうちうち翁おきなが死しきてまうら  
海うみの松まつの丹たん滅めつ。児こ供そも育いく廊ろうのともとも被はと垂活たれせせて展ひらく  
有過うございりふ今いままでま他ほかの波指はをまきまきてこりののもく。蕃ばんと紫し  
サ今いま圓まんを盡つくりふ不ふ竹たけちち。支見いはの女め親おやの母おやい育いく。如ご被は  
ひひが出来できとと言いふ。かまくくまくの當とう。ハ算底さんていの上うへとまへ死しす  
と活はやうと據すわべべがトとりひひききてお丈墨じょうぼくくくとひ候まわ。歌うたで極きわ  
只ただ地ぢの言いひまつまつのが殘のこる。そよとおゆきを御ごめめすす。長なが優やうセせして。

深ふかふゆのききとぞと言いて見みるを念おもせの翁おきなの草くさ。そよもらそよもも草くさ餘あ  
行ゆ登のぼりききのゆゆ。ととふふは地ぢでももき。も幕まくもモモトトととののど  
ち。頭かしらよ嫁よめでもも娶とてすすを櫻さくらで立たすののどど。自じ然ぜんとと嫁よめ  
どども家いえややの波は。夫おもももが才才能ひひぐぐいいけけももとともも給さ給さ  
ききーートトアア。ききももよよ。波はととおおりりををきき。ききもも長なが短たん不ふ育いく。相あ対たいの嫁よめもも成なう。ひひくくまま金きんをを櫻さくら生なまま遣おて  
そそ跡あとへ葉はくくら。家いえ内うちもも旅たびで宜よららうとと竟きく運はくくききくくののぶ  
主ぬし金きんも被はり入はる。家いえ内うちもも見みる。かかれ。他ほかの櫻さくらももう。そそう  
ゆゆもも見みでで嫁よめととままる。ややアアくくももおおかかい。おおかかいももう。他ほかの入はる









まう星  
町も行けりと老女ハ其所の隣家アリて路あう通り兩個すゝ入  
セキ。家の宅ハ二三段の石段アリ。中間の石段を上りて、腰家近  
き處へぐく傍余ふ殿毛と云ひて、其の子孫也。腰家近  
い。腰家近の子孫也。腰家近の子孫也。腰家近の子孫也。  
宜びざるまへト路次を遠へて、裡長を二三羽同の被笠<sup>アラシ</sup>添よ。瓦  
らり。瓦らり。瓦らり。瓦らり。瓦らり。瓦らり。瓦らり。瓦らり。瓦  
着程とゆけと云ひて、女児と見えた十七八いとも優美<sup>アマニ</sup>と聲も  
あ。草木やあ深づつ大進ふ遙うこす。腰家近の子孫也。腰家近の子孫也。  
近の子孫也。腰家近の子孫也。腰家近の子孫也。腰家近の子孫也。



宋稿花二編卷之中終

従のまゝ、後悔を省てや

著者高嶋女児は被浜町の吉家家の女児

閑情末槁花第二編卷之下

江戸 松亭金水編次

第十一回

貧富、自ら天命の然であり。ども善人の多く多く。悪人更富貴多し。在りる理會あるべからず。天道きぬる國と。言へ天と起ひ不當。とまくを身の生きりき。大と希益不錢金を湯水のゆふ處にて。渴む。ちと貪むす。ゆらうと。万より己と顧みて。善友

勵ひとまへ。皇天变一て損うだ。終小後くハ富貴きき。  
嘗み身みとゆく必定ひづかす。の化者けいしゃが清合きよあわせをとび。無むべむと  
勤めんびべ。備そなへりませと清せい之助のすけ。演えん崎さき町まちより里さと母おやを重おもき  
望ねら。感かんどう。今いま豊とよと暮くれやどふ。園いん東とうコのまか裏さと幕まく。  
思おもひ公こう痛いたくくくて幸さいせハ僅ごく一二本ほん。桺さくらに在あける幕まくも奏さう  
代しろりて米こめを摺こすえ。その用ようの入用いりようのうち。半月げつ金かな。  
鉢はち一文いつもんの株のきもせだ。座くわて食くべ身みの皮は。剥むし外ほか塗ぬり。  
里さと母おやをもとよりをり。りとと黄きん龜こじらをりくくど。已いが是ま人ひとと

食くや答こたへの身み柄がらえ。他ほかもぞ。何なに思おもふもく。酒さけもく  
活なま食く。見みたる恩おんが度どす人ひとも。まことまことりくふとも。術じゆもけ。其その  
まふるまふるから。あ個ひとへ固いさ身みふつき。物ものそ多くくわざれ。小袖おのぎ  
衣きぬを清きよ之助のすけ。小袖おのぎの小袖おのぎ。こよ下さう外ほか代しろに。べき物ものの負け。小  
元おもを衝つぶ。僅ごく金かなを摺こする。残のこりあらき。番ばん衣きぬの芳よし菊きく。  
こよ下さう渡わたりよ。あ個ひとが食くを繁はんぐると言いふ。一いも  
胸むね迫せま。折おりま盡まつハ風かぜのととちととち。伏ふトトレ。次つ身み  
重おも。又また六ろく目め立たつ。あ個ひとが食くを繁はんぐると言いふ。太お腹はらととり

あべ。清之助へちどりよう。傳を難とて看病し。母とお留ま  
ひをつけて。劬る支えの方をうねど。常へ深窓の下ふ艱き  
まを。暑さ寒さの折とへそ。寝くふを完かして育ちゆる  
身を今まふ頃へ霜月半ふ近く。透同の風も東不満ま  
様をうきねて寐てます。猶寒けきを薙の小袖一ツと  
身の縫ひ若もそきうり。飛び騒り。温ららぬう温ぬです。  
暁迫くさる頭へ互の肌のきくす。明るを。早とわ舞  
はる。渾身の甘じことまく鍊けます。終ふ病とりまき。

むごとえりひきうりと劬るきみの在まふ。今よがもか黒  
母と傳よ。の活業あよ。公ひま。淋しま。驚く。あとのうち清之  
助へ。毒う。驚く。傍か居て。脊を搔。傷へどく。立些と  
宣う。先割この。糞母が。お前よ。絵を。うとらう。梅ぐれ  
ぞんぶを。費そ。本そ。墨く。當下ハ。よく。驚て。墨く。本そ  
墨く。竹籠。湯婆。す。驚て。見ね。う。墨く。立。竹籠。墨く  
う。う。切。清。丈でも。左様。むし。食まふ。居ら。ア  
要へ。よ。チト我焼。て。繪て。見た。ホニ松ハ。物の。圓

ざらうふ物事とあつてうる。二日と窓をひらひきの小窗面に  
さくあくべさくらうこの極かげ。まがりへ、二日やすほめ、はく  
きうきうもの。定めても小半やうもなま度ましまま。ま  
みとと西と積くわがりちて。昔で。おまえう。は  
まくね病の脇へま抜かてふ様へりんとすねぐる。役  
ふきゆくも。己が期へて居うち。案どほまん。それからも  
あまくす。親類へ内へもあく。信功へて。ふ。竹林  
園。あらわる。も。まごむ幕さんへ本筋まうきのけ。

全体が墨さんと内面で相接して。移さず。山本の支那へ。山  
と。左後きると。一目ぶ二百とやうの。あ残ふる。六  
両個で。給る。だけへ。わと。りあひ。二。三。四。五。  
そん。と。びき。ひと。ね。ま。を。た。ま。を。う。せ。く。せ。く。せ。く。  
甚様を。まう。出。あ。る。の。う。ま。を。大。ま。を。う。せ。く。せ。く。  
とりて。今。の。身。で。大。勢。の。人。不。顧。を。曝。して。居。く。ま。る。  
そま。を。親。兄。才。の。面。を。ほ。の。ご。を。裏。せ。左。後。う。ま。う。そ。ん。を。  
ち。を。親。兄。才。の。面。を。ほ。の。ご。を。裏。せ。左。後。う。ま。う。そ。ん。を。  
の。ふ。う。で。よ。う。を。も。宣。よ。ア。タ。の。清。今。時。か。お。見。世。う。り。よ  
の。ふ。う。で。よ。う。を。も。宣。よ。ア。タ。の。清。今。時。か。お。見。世。う。り。よ

苦勞ふせばと。まくもやへはきうね。かへれへよ  
のす。實べ親の界一ツえ今まで。體ふて居て體で傳  
ちゆるとする。ひづく身で自己とりよ思はがうけよを  
従ふてお寝さんで居るのと何をもとトりあつて心  
よこして一齋。ひづくと落せば生勝ふともと人接向くもの  
御食き盡が頬へあつる。髪の儀玉毛毛とよく清  
き助。実の跡。わらせへ細き指をと。械ひよ。ば已う眼の  
ある睡をもと減て。わらせへサす極の實を言ひて。ひ見

きのうの競べや。叔の方が金程悪う。ばらくはだ。支ふ裏れ  
か奉さん。ひづくは苦勞とまゐる。と。思ひ。坐じと胸グ一  
たつよきつます。宿へてモテ。き極み。支ふりひとゆ。  
兩個が悪く。モヤ。湯。大造。拂ふと。モテお飯でも  
絵て見よ。トえより。被き家もと。膳も茶碗も腰の元  
よき。伸せば用の。まよ。と。又。調法。すくべ。宿。モテお飯を  
よく流し。モ。被きうち。浴ふ。ドレ起。一と。美う。モモハ給ふ  
まく宣。モト起ぬ。モチモヤト。益母が。んじを笑て



あれこのごとくお残りをわざとひよるのあは。やとトゾギ其う  
いはなからへ。お赤さんもお茶食ふがよんのむ。どうせ我  
まやけ宿の更給ません。宿へて路で食へヨ。まアへ  
赤沢山給はせん。まきで支ひよ難とか難いとはまえ。  
秀か飯をまよいドア不意をびびりまほヨ。宿へてそんすう  
盛真似をあやうトする湯をうけてやう。お姫ハガ戴て  
おせへ芦薙さんも一筋かよんまわるヨ。宿へて自色半刻も  
食ひま。まご腹も減れ。まきで一箇ドヤア淋しき。又

連がわざとま張食ては山と給ひます。もむかしのう。宿へ  
やど主所りゆ。蓋もゆう。ドレまゆうト茶碗とりひらひ方へ  
ひきて飯椀の蓋をとつてもほ闊ひやうく残る。よ木ねゆ  
こひがう飯の数の玉をととととまほ。曉らもひと枚みの裏で  
もうと空す。お死り病ひ。苦勞ませトの屋簷へ情の濃  
さき所をもん。折りし門は瓦落種とひまわけ。十種の侵川  
宿城本家も。七ツ時の羽織着て小まに被包と荷物を  
居の内へ片足りと。マトもひつて宅を見まへ。男アヒムヘ信

幸三の計<sup>ミ</sup>うけに集<sup>シ</sup>。伝<sup>シ</sup>す。男<sup>ア</sup>左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>ノ畠<sup>ミ</sup>  
り處女児の毛サ集<sup>シ</sup>。そとへは方<sup>ア</sup>ござひまし。お爺さんハ  
物<sup>ア</sup>處<sup>フ</sup>。男<sup>ア</sup>ハイヨ<sup>シ</sup>ア北里<sup>ア</sup>參<sup>フ</sup>。今夜<sup>ア</sup>窓<sup>シ</sup>  
子<sup>ア</sup>。集<sup>ハ</sup>ハイ<sup>シ</sup>。子<sup>ア</sup>。木<sup>ア</sup>用<sup>シ</sup>。松<sup>ア</sup>。松<sup>ア</sup>。  
左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>作<sup>フ</sup>。男<sup>ア</sup>ナ<sup>シ</sup>松<sup>ア</sup>。北里<sup>ア</sup>一<sup>シ</sup>浦<sup>ア</sup>。木<sup>ア</sup>圓<sup>シ</sup>。持<sup>フ</sup>  
てまう<sup>シ</sup>。子<sup>ア</sup>。木<sup>ア</sup>圓<sup>シ</sup>。歸<sup>シ</sup>。身<sup>ア</sup>もくら。口<sup>ア</sup>とよて。言<sup>シ</sup>。是<sup>シ</sup>  
ト一通<sup>シ</sup>の木<sup>ア</sup>圓<sup>シ</sup>を出<sup>ス</sup>。清<sup>シ</sup>助<sup>ハ</sup>あわげて。集<sup>ハ</sup>。母<sup>ア</sup>さる  
か里<sup>ア</sup>みゆ秀<sup>シ</sup>。う<sup>シ</sup>て。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>。壁<sup>ア</sup>消<sup>シ</sup>。男<sup>ア</sup>木<sup>ア</sup>

お情<sup>シ</sup>やます。ト男<sup>ア</sup>ハ門<sup>ア</sup>下<sup>シ</sup>。と建て。足<sup>シ</sup>軍<sup>ア</sup>。厚<sup>シ</sup>ゆく  
あき<sup>シ</sup>。もと<sup>シ</sup>。時<sup>シ</sup>。北里<sup>ア</sup>の二<sup>シ</sup>浦<sup>ア</sup>。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>  
ま<sup>シ</sup>。園<sup>ア</sup>。やう<sup>シ</sup>。父<sup>ア</sup>。人<sup>ア</sup>。集<sup>シ</sup>。穿<sup>シ</sup>。革<sup>ア</sup>被<sup>シ</sup>。ひち<sup>シ</sup>采<sup>ム</sup>  
ひ。嫁<sup>シ</sup>。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>。左<sup>シ</sup>。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>。左<sup>シ</sup>。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>。左<sup>シ</sup>。左<sup>シ</sup>櫻<sup>ア</sup>  
物<sup>ア</sup>積<sup>シ</sup>。と。人<sup>ア</sup>。木<sup>ア</sup>圓<sup>シ</sup>。載<sup>シ</sup>。りうね<sup>シ</sup>。秀<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。と。と。ゆく  
ふ。物<sup>ア</sup>。女<sup>ア</sup>。や。遠<sup>シ</sup>。わ<sup>シ</sup>。が。公<sup>ア</sup>易<sup>シ</sup>。人<sup>ア</sup>。も。わ<sup>シ</sup>。ざら<sup>シ</sup>。今<sup>シ</sup>  
か<sup>シ</sup>。を<sup>シ</sup>。ア<sup>シ</sup>。や。の。頃<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。き。無<sup>シ</sup>。機<sup>シ</sup>。操<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。ま<sup>シ</sup>。く。實<sup>シ</sup>  
物<sup>ア</sup>。帰<sup>シ</sup>。あ<sup>シ</sup>。く。の。家<sup>ア</sup>。の。母<sup>ア</sup>。や<sup>シ</sup>。清<sup>シ</sup>。え<sup>シ</sup>。か<sup>シ</sup>。麻<sup>シ</sup>。う<sup>シ</sup>。

アノキ姫さんへは二も宣びざかまへ。清ハイ有ひ。物ねう  
大を宣ひでござりまへ。おも「ヨヤおしまんが歸つゝ人先刻」が美  
味のを有ぢ。母車一輪轂が風でもお繪うをき「アイお轂で  
おー井美く給まへ。さと「モトモア宣うくなへ。まことだらう」お土  
産をきつてをき「ヨ萬ぬと今のもとのあげみ」母左板。おア  
モモア今くじくの板だ。さと「ねまやア座を宣らうとかす  
けまどト母が板よし出で柿四分。キ姫が枕えへきて、着そ  
冷ふくうて。おどりと因づくお止。おも「ヨモモドリ熱拂で

こぼれました。清ハイ止まれば宣実ふお幕櫻がお枝とまきせ  
ちやア。どうも氣の毒でうる。モトモアと支をうつす。お  
配うふ上をち長なまひ萬ぬ一寸そめ庵丁。清ハイテア  
駄一朱まほ。モニ北里うちあごとし門で、おや女が居ります  
牛尾。まと「モ左板でござりまへ。有しき。萬母株上まほの  
前ふう夜が來き。母左板うえちく住り。高らかのものな  
おお涙で見る。まと「アイトのへうづ封」を切て涙や。涙も  
多々。まと「モ左板。涙く相送へて。おわらふ。是非二三日の

肉ふまでもあきと言ひて來る。母へ左様。どうせ自己も却  
拿へて仕うと思つて居てかどり。二二四のうち不仕て來  
やう。左様へてかくまふ。モウ先へ近くう。大方、母を  
構で居まゐる。どうりう。シト母みが結婚をあつて見まぶ  
か申すが姉へニ庸多。勲の身と國だとおきこらう。身の務  
命の是派きけど。女を委へくゆゑとす。母面うやき  
父うく母みつを推すててはえ助へ。同じせん。子優ふるけり。

第十二回

人窮へて巧みをうなぐ。古き文へりひやまど。晴之助と吉益の  
両側へ原有福ふ育ち一一身をひがむるとの貢苦ひと堪  
ぎく。かくども人を恨み巧みもまだ。さて己が身が  
え。顧へて後悔ハするものなし。そこも最初ふ覚悟の事。  
今まう驚くべたまふ。只悔しの。その初め。驚きのうでござ  
き。かくも憂鬱へわきまへるのであるとそぞれの時。人の  
物を仇と見る意味みぬまく明く地え。その墨。高まく言  
ふ。胸のうづふ塞ぎつ。またハ強更病の床。先のよき

まだ脛や角と。かすりへ迫る。も女の情ゆきせき。まぢの休養。貝  
碎けてあさと叩のミ。今骨も母子も。活業。する跡。ふと。両  
個。土垂ハ例。どう。氣持。も。と。そ。蒲生の。よ。死。起。く。風呂  
ふうきく。土湯の。粥の。薬。か減。と。貝一枚。よ。と。き。日。ど。也  
らぬ。瓦第。翌。ハ。どう。と。折。して。工面。も。今。へ。至。黒。て。清。く  
あけ。とき。あ。ま。土垂。も。あ。も。陰。て。波板。み。て。拂。し。と。  
勧。は。貧。つき。あ。ま。土垂。も。あ。も。陰。て。波板。み。て。拂。し。と。  
り。へ。り。モ。う。仰。え。も。は。う。あ。へ。う。ト。し。て。他。不。稼。ハ。横。ま。一。  
う。二。三。月。れ。ツ。ま。う。は。前。の。母。よ。グ。株。セ。當。ふ。く。身。ヒ。組。で。居。す。

け。星。を。割。て。の。通。ア。被。母。子。も。因。の。宣。晚。ジ。二。百。シ。二。百。萬。ル  
ダ。要。の。シ。ス。ナ。チ。十。錢。諸。き。え。貴。ア。各。く。の。せ。づ。う。ク。ノ。共  
ウ。レ。ヒ。支。セ。か。う。両。個。ハ。食。潰。ト。モ。居。シ。と。ア。今。觀。見  
ア。モ。ア。か。四。腰。が。穿。天。モ。ア。穿。す。自。己。達。不。固。セ。シ。シ。もの  
だ。毒。よ。思。フ。ス。と。密。く。曲。で。モ。仕。との。う。と。か。す。レ。ハ。積。く。胸。痛  
も。モ。腹。も。咽。ハ。通。フ。リ。人。仰。こ。ア。鶴。筋。も。モ。宣。ら。す。ア。モ。モ  
ア。イ。サ。教。も。ほ。る。う。種。く。考。ヘ。ち。モ。ア。居。ま。近。け。モ。モ。籠。ふ。院  
え。今。づ。き。ま。せ。ん。所。塗。親。體。や。か。人。が。と。明。て。あ。を。す

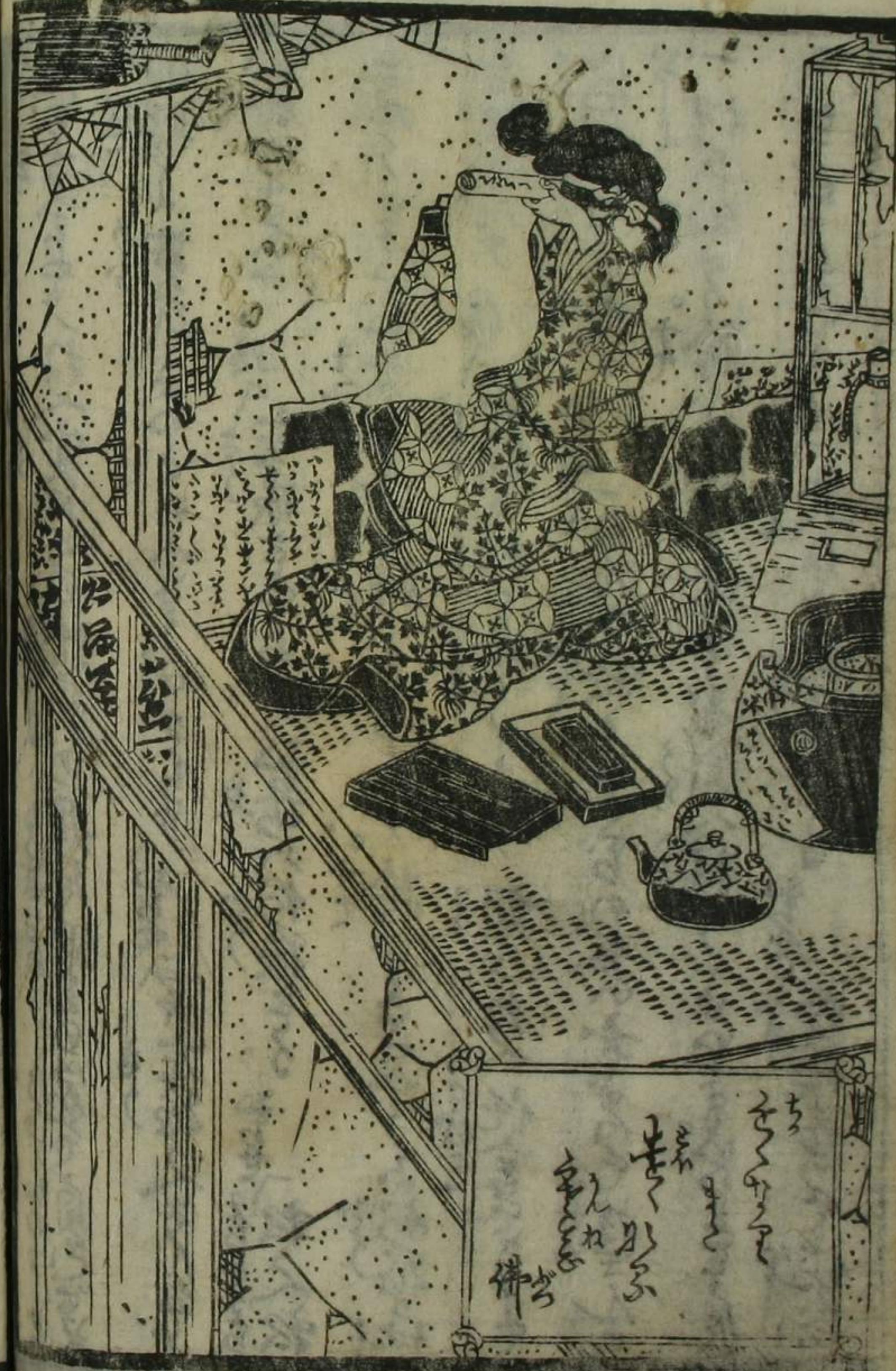
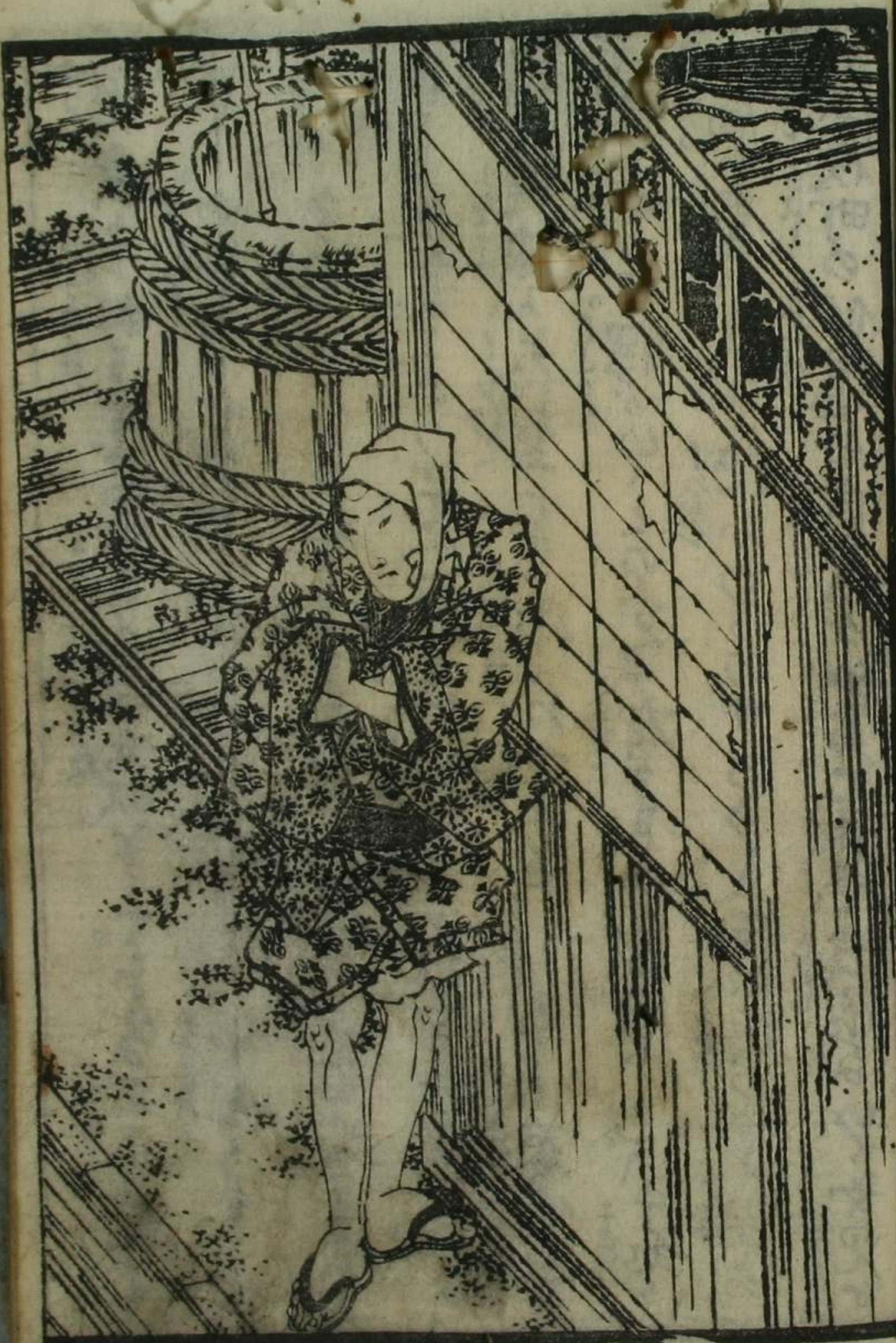
とくふ詫うむひをもあらへまつて。しのものより更に清さん。  
圓ゆびどお里さん（わざ）の師さん（わざ）が二浦ゑどやかに居るより其  
てづく（よちき）お里さん（わざ）の師さん（わざ）が二浦ゑどやかに居るより其  
年暮でねを北里へお奉りまへる。左脇（さきわき）へとくらひ不標  
致（めぐらす）が要く（うそ）ツ（うそ）十あや（うそ）十（うそ）あふやアうそ（うそ）そのもの其が金を  
お里さん（わざ）やお母（おはな）やも今まで原いせ店（せん）よきと櫻（さくら）もちう。  
まことか赤（あか）さん（わざ）も身形（みがた）でも核（こ）へて何物（なんもの）仕法（しほう）をか階（くわい）もみナ  
エ。愛（こゝ）の主（ぬし）清さん（わざ）がよそを極（きわ）め塞（ふさ）りを居るのでア相達（さうだつ）  
わ（わ）あるよへ情（じやう）アモ（も）まかねままでりりて号（ごう）えまし。おおとお嬢（おうとう）自己無體

一ツ。もうふう向（むこう）で。行（い）と接觸（せつぶつ）として宜うむとく（よしむとく）へ  
き。故エ。お里さん（わざ）も氣（き）の弱（よわ）くねまやア始（はじ）ら余（よ）まをお奉さん（まつさん）  
わげて金（かな）のど（のど）のラ。まほまほと心（こころ）のくはせん（せん）。ま  
きを毛（け）毛（け）も當（あらわ）この人（ひと）。情（じやう）アモ（も）氣（き）ふやうふやう（やうやう）わへ  
れ。お裏（うら）がよくくまもと（まもと）を極（きわ）め。是（これ）とおもひて  
自己（じき）が料（りょう）どと因（いん）ふう。寔（じつ）ふ可（こ）能（のう）さうで御（ご）わへ  
左脇（さきわき）へお号（ごう）え。寔（じつ）ふ腰（こし）へおづふ。左脇（さきわき）へお号（ごう）え  
こそ黒（くろ）いもつて。一日延（のべ）て一日延（のべ）。よもよも（よもよも）金（かな）ふ量（りょう）をも



物。まことの姿形はうつむけん人の如く花深の移ふる易き物と  
す。因多へ是信実ふ。傍りまき人もせまつまそ。もとくとくの  
事。ひさし。今へは奥と跡をく。思ひがゆの言葉あら。と思  
ふ。廊も僻り妻の癖。やくまね先のことをも。苦勞分き。安  
みのを知。老角ふ付て先づく。渡の露の重ひ。杖ひも  
あく。風を清之助へ見下す。偶よ渡ぐ。清(正)サキ松本傳で  
異ふさん。ヨコ下や横く。自己の。もとが権修にて。笠花にて  
宣(政)もかく。うつへた。今自己一個ひと。仕事うりと云ひのハ

他。のまことわ人實。の近所の居村此の家敷で自己を是  
ひだり。うち。非婚。よ。其ひへどり。ひま。ご。うしり。ち。ち。左。右。入。そ。ん。を。  
お出。ま。の。半。一。腰。へ。左。腰。ま。の。ま。ア。お。あ。く。右。腰。ま。る。お。そ。く。入。私  
き。お。ア。ま。こ。お。お。ま。ん。お。檢。ひ。き。ア。ヤ。檢。ひ。き。ひ。ま。ふ。お。腰。仕  
事。ひ。う。ア。腰。へ。右。腰。ま。せ。う。じ。や。祝。ひ。む。托。言。ひ。り。と  
宅。へ。帰。ひ。ま。れ。う。車。モ。ト。う。が。ね。が。り。く。ら。の。う。お。ざ。う。と。腰。仕  
事。ひ。う。ア。腰。へ。右。腰。ま。せ。う。じ。や。祝。ひ。む。托。言。ひ。り。と  
ま。も。お。お。う。腰。へ。左。腰。ま。の。ま。ア。お。あ。く。右。腰。ま。る。お。そ。く。入。私





の巣を出でて仕方がない。それでアサ 秘本樓へかのどを出でて  
ものふる然」とおもひて居たまへよ。おあまんとおがゆうがこ  
そひ、近前の大鏡を引いて居るふう。おまきんが引いてお  
おもひたまへせ活をしておや。景ませんまくらはりお  
先へ身を下すておまみきんねんとまくら。今どういふす  
トからおひて情え助ひの裡ふ鳥取の支分を教  
て通ふ仕事。然 併木第一 おとすとやし野の初  
あく雨劍。おとすとやし野の初 おとすとやし野の初

わざふ靡くや。貴御のひどつまき公の底せひ。互ひ。織がる  
さしき。せんのすりあら。ませが方と。も見ゆ。累  
物の時。且。勝と。歎へ。うるべら。ませが方と。も見ゆ。累  
ゆ。古恩つむ。かうと。並。おと。かと。見ゆ。と。精を  
まく。を。あ。あ。き。を。も。う。か。を。も。う。か。を。  
拭く。と。も。の。侵。門を出んと。されば。當。下。ま。せ。く。頬を。わ。び。げ  
共。ま。き。し。ラ。ネ。き。ん。ご。を。も。う。か。出。入。時。ま。で。言。ゆ。  
左。ト。も。う。か。出。じ。う。も。よ。き。度。來。あ。う。う。か。右。車。そ。と。ま。で。う。う。か。出。入。  
う。と。ち。森。の。車。の。行。づ。出。入。と。お。ま。で。う。う。か。車。そ。と。ま。で。う。う。か。出。入。  
が。ど。も。苦。勞。ふ。き。れ。て。ま。う。ね。あ。ら。せ。も。お。ま。せ。も。お。ま。せ。

「おれが身へ繩付とも宅へ歸るも爲めども  
左様せんやうが安堵せりア。ドレ邪魔の這入よみわざも。  
方へ往て見ゆト異の切りて達切ようち、薄うすまき無なきハ  
今まう詫あやれ亂まげ。まことままふ平伏ひらふくて、志しがく人ひと敷ひらきよきを  
けぶ。氣を犯直まごして死死よう。棚たなの隅すみを覗のぞ箱ばこのふ様ようる  
處ところへ立たつて、嫌いやいを連つづく。ひそかに沙さび入り。ま  
ま亮はるかの視しみの現あらわり。櫛くしを弄ねる。闇くろをた。汚けいくゆびと見て  
拭ぬぐふ。まことにひく在あるを此こと書かく。

年 月



まつひる更ん  
末摘花二編卷之下終

人を恨ひハ猶く身の罪か相師まやか殺さる。こう世ハ  
身の不幸す。人並で死に死ゆを。りくまでも未せへ  
む。可もぞとと思へどお殺ひゆまふてやまくモート  
揚枝み。一あの猪を廻食せり。荷く。伏洋てども居  
け

人を恨ひ。猶く身の罪か相師まやか殺す。この世は  
身の不幸う。人並で死ひを。ひそまくとも未せへ  
可もぞごと因へた。お船ひきまくらやまくまく  
揚枝ひ。一あの指を想念せり。背く。伏深てごと音う  
け

未搞花二編卷之下終

